

【個人研究】

顔とコミュニケーション

— IV. 暮らしの中の顔 —

臺 利 夫

Face and Communication

— IV. Face in Daily Life —

Toshio Utena

The lesson for children is sometimes better achieved with teacher's eye movement or facial display than with his vocal behavior. The eye may be at times more than an auxiliary to the mouth. One possesses oneself of the significance of the unity of mouth and eye. The Face as a whole which consists of eye, mouth, nose and other parts of the face is revealed invariably in diverse situations. And the face is founded on an individual physiological basis, while it may be shaped to resemble a given socio-cultural role which facial actions refer to. For example, grandiose facial actions may often be expressed by ministers or generals.

A certain facial action rises in a certain social context and the impact of the face leads toward stress of a socio-cultural role. It is difficult, even if one wants to, to dispense with the role built into his face. Such a relation may be found similarly between the face of nation and its culture. Its culture is carved into its face.

1. 話は目で聞く

日常の社会生活では何時でも、さまざまな場所で人と人が出会い、語り合い、身体を触れ合い、行為のやりとりをする。その際には互いの顔を合わせたり、視線を交えたり避けたりすることが否応なしに伴う。顔をつき合

わせることは社会生活にとって欠くことのできない意味をもっているだろう。ここでは日常生活を営む個人相互の間から出発して、公的な関係やさらに広く国民性にも留意しながら問題を考察してみる。

単に多くの人が互いに身体を接近し、顔を近づけて集まっていればそこに集団があるわ

けではない。横断歩道で青信号を待っている十数人の集まりは集団ではない。メンバーの間で相互の行為的・心理的交流があり、かつ全体としてまとまって社会的・文化的活動をする時にはじめて集団であるといえる。同様のことだが、繁華街の道路を接近して歩いている二人が常に知り合いや恋人や親子であるわけではない。両者の関係は距離の大小の他に身振りや、その他の非言語的行動で総体的に表れるのである。互いが顔を向け合って、口を動かしているとしたら、まず間違いなく会話がはずんでいる知り合いであろう。ましてや肩を抱き合ったり、背中を軽く叩いていたら親しい関係が明らかである。むろんこうした行動から両者の関係を判断する際には二人を取り巻く周囲の場が同時に把握されなければならぬ。駅前でアンケート調査を強要する男とそれを断っている女の間は一見して親密な間柄でないことがわかる。

社会的な実態調査では、こうした場面の切りとり方が見分け調査の成果を左右する決め手になる。場面の特性として押さえるものが大まか過ぎるとどれもこれも類似してしまうし、細かすぎると各自あるいは各ペアーの行動が些細な刺激で多彩に動くために整理しにくい。

地方のある駅から商店街をぬけて蛇行しながら続く細い道を通っていったところに高等学校と精神病院がある状況を選び、高校生と患者の歩行の仕方の違いを調査した菱山ら(1968)の研究はその点で洞察に富んだものである。日常の状態では、高校生は二人とか三人が横並びになって歩いているが、患者は縦並びで互いに間隔を開けて歩いている。前者では話し合うなどして関係が緊密だが、後者では無関係の様子がうかがえる。ところが期末試験の頃になると高校生も関係が薄れ、一人一人に別れて縦並びになり、中には参考書を読みながら歩いているような生徒も認められた。

人々の接近の仕方の相違は社会的・物理的空間によっても規定される。大学の講義はし

ばしば講堂のような広い教室で行われるが、その際、学生は自由に座席をとることができる。長期にわたってそのとり方を調査した平尾ら(1964)の研究によると、学生の座席のとり方の変化-移動量は一年生ではあちこちと動いて大きいが高学年になると減少する。しかし特定の学生は低学年の時以来何時もほぼ同じ特定の座席をとる傾向があった。

著者は講義の聴きとり(理解)の度合いと学生の座席の位置の関連を調べたことがある。一般的にいうと座席は両側から埋まっていき、遅刻した者は後側に座る。教団の前-教師の正面は避ける傾向がある。こうして座席が馬蹄形に占められた教室で中央部の比較的前側と両側の前の座席の学生は後ろの壁近くの座席の学生に比して一層よく聴取していた。つまり彼等は教師とのつながりを維持し、授業中も隠れたコミュニケーションを保っているのである。授業中に多くの学生はノートをとっていて理解は疎かになりがちだが、後側の座席の学生はノートさえとらずに互いに私語していて聴いていない。それに対して前側部分の座席の学生は教師の顔を時々見ながら聴いていてよく理解もしているようで、試験の成績も相対的に良い。

学生の仲好しグループがなんとなく前側に座る者もあるから常に彼等が好成绩というわけではないが、教師の顔を見ることと聴きとり方の関係は子どもでは一層明瞭である。

「授業中は教師の話を目で聞くな、眼で聞け」という指示は小学校でしばしばなされる。教師は児童に背を向けて板書している時でさえ教師の方-板書を見ているかどうかには注意する。眼鏡をかけている小学校の先生が「板書していてもお喋りしている子は眼鏡に映っているから、後ろを向いていても直ぐ見つかるぞ」とおどかしたりする(実はこれは無理なことなのだが、こういう注意の仕方は全国共通のようで面白い)。確かに、相手の言うことを解ろうとすると自然にしっかりと相手の顔を見るようになるのである。ただし、講演会の場合などに、いかにも意を得たというふうに、

講演者の顔を見ながらうなずいている者が何人かいるが、これは習慣的な挨拶のようなもので、彼女(彼)らがどこまで理解してくれているのかは疑わしい。

以上の諸々の観察は、近年唱導されてきたアメリカのエスノメソドロロジーの考え方に似ているかもしれない。この説はガーフィングルという人が創始した一つの社会学派のもので、社会学者は「人々が日々の社会的相互行為の過程で他の人たちの言うことや行うことをどのように理解するかの研究」と定義している。けれども、上述のような理解の仕方はエスノメソドロロジーと関係なしにわが国でも目を向けられてきた領域である。そしてここで参考になるのは、むしろ従来から検討されている固体距離(パーソナルスペース)の問題であろう。これは互いにコミュニケーションする人と人の間の心理・物理的な距離ないしは空間を指している。

1. パーソナルスペースをめぐって

ある人が自分の手で他の人を掴んだり、触ったりできる距離から双方が腕をのばせば触れ合える距離がパーソナルスペースである。これは日本人ならせいぜい70センチから150センチほどの間隔で相手の表情ははっきりと見えるだろう。相手の顔の表面の素地も明瞭に見える。こちらから15度の視界には相手の顔の上または下半分が含まれるし180度の周辺視界には手と座った位置での身体全部が含まれる。

人々がどんな位置に立っているかで彼等の関係やまた彼等が互いに持つ感情がわかるわけだが、妻以外の女性が夫のパーソナルスペースの圏内に入るとややこしいことが起こりかねない(ホール 1970)。

パーソナルスペースを超える距離になると相手の表情の微細な点は見てとることができなくなる。これは社会距離といわれるが、個人的でない用件はこの距離で行われる。社会距離からさらに遠ざかり、双方が約4メートルから10メートルにも及ぶ隔たりは公衆距離

といわれる。VIPのまわりの厳重な警戒には自ずとこの程度の距離がとられるだろう。10メートル以上になると普通の声では通じないし、顔の微妙な表情や動きも感じられなくなる。しかし演説会や講習会での講師と聴衆の間にはさらにこれ以上の距離があるから公衆距離はかなり延長されるといえる。

普通、パーソナルスペースとは、人と人が正対面して、互いにまなざしを向け合った場合の距離である。まなざしの接触が無かったり、場所が暗かったり、さらには、一方が他方の斜めの位置にいたりすると距離はいくらか短縮する。とくに背面に位置した場合は最も近づくことができる(田中 1973)。だがパーソナルスペースの伸び縮みはその場の状況に相当に影響されるだろう。混雑した電車の中では他人同士が正対面で密着せざるをえないことも時には生じる。その際は顔と顔がまともに触れ合わぬように懸命に横を向く人も多い。また電車が到着して先を争って乗ろうとする時は自分の胸が前の人の背中にくっついてあまり気にしない。身体の造作上、もし顔が180度回転できて背後を見れば、これほどは密着できないだろう。時々町や村の祭りで見かけるようにお面を後頭部にかぶっていたら、それだけで電車を待つ人々の列にいても後からゴリ押しされないかもしれない。

ともあれ、車中では密接した距離で否応なしに鼻を突き合わせ、まなざしを向け合うことが頻繁に生じる。しかしそこは公共の場として身体の動き、姿勢、服装から顔つきに至るまで暗黙ながら一定の規範が保持されるべきなのだが、これが意外と実現されにくい所でもある。山根(1987)は電車内のサラリーマンのポーズを女子大生に観察・記録させ、彼女たちの内面にある模範体系のモデルなるものを描いている。それには上記の諸点の他に実にさまざまな行動・態度が挙げられているが、中でもとくに顔の動きに関係する点だけを記してみると…

『サラリーマンたるものはまず、電車に乗

る前に自分の身なりをチェックしなければならない。髪は短めであまりにキッチリとは分けず、軽く流した感じでいい。油性の整髪料はつけ過ぎないように。髭はきれいに剃る。…チェックが済んだらいいよ電車に乗る。…ドアの横に立ち、口をキュッと閉めて。晴れやかな目で外の景色を眺めよう。乗ってくる女性を上から下まで眺め回すようなことはしない。…ガラスに自分が映ったからといって、櫛を出して長々と髪を梳かしたりしない。…視線はやはり窓の外に向け、目の前に座っている人の新聞や女性の胸元をのぞきこんではいけない。…カバーのかかった文庫本やビジネス書を前かがみにならないように目を離して読もう。ただし読みながら笑ってはならない。本がない時はキョロキョロせず、腕を組んで目を閉じ、難しそうな顔をして仕事のことを考えよう。だからといってそのまま眠ってはいけない』

このモデルは観察する側の現代風フォーマリズムをも描き出していて興味深いが、乗客として遵守すべきある種の規範があることは明らかにされている。ごく稀れにいるが、混み合う車中で携帯電気髭剃り器を使って顎髭を剃る人などはとくに軋しゅくを買うことになるだろう。

ところで、相手と相互作用する際に、互いの手に道具や武器を持つと間隔は当然大きくなる。例えば剣道では成人の場合、互いに普通1メートル15センチほどの竹刀をもって面と向かう。腕を真っ直ぐに伸ばさないとしても（柄が約37センチだから）両者の間隔は2メートル前後にはなる。この距離の中に入れば、どちらか一方が相手に向かって飛び込むと竹刀が小手はむろんのこと面や胴にも届くだろうし、また飛び込んでくる相手を撃つことも可能であるから、通例より大きい間隔であってもパーソナルスペースである。だが剣道では「相手からは遠く、自分からは近く」と教える。互いに同じ間隔を保っているのにこれは一見不合理だが、どちらが先手をとって飛び込むかという動きを入れて考える

と不合理ではない。止まって相対している位置から同時に飛び込んで面を撃っても一瞬早い方が先に撃っているのであり、つまり相手は当方に届かず当方は相手に届く。こちらからは撃たず、相手が撃ってくるのに応じて一歩下がって距離を取って相手の竹刀が届かないこともあるが、この場合はパーソナルスペースの外に身体をおいて逃れたのである。いずれにせよ剣道の場合には運動の過程で距離を捉え、瞬間の時間に留意することでいわゆるパーソナルスペースの問題を省みる機会を与える。なお、概して暗い道場で、2メートルほどの距離にありながら防具の面の金物越しに相手の目の動きを凝視している点も見落とせない。相手が起こすであろう瞬間的な動作を、身体の構えとともに目の動きからも捉えるためであり、この距離では表情の微細な点は見れないとする一般的なパーソナルスペースの定義はここでも当てはまらない。

ところで固体距離と社会距離の関連はしばしば人間関係の困難な問題と結びついている。一方が社会距離を保っていたのに他方が固体距離をとるか、さらに密着してくるとすると前者に不快感を惹き起す。これはある事物、事態を挟んで関わる複数の人の体験が互いに相違する場合に欲求不満が生じるという心理学説と通じるものである。たとえば単独で見知らぬ地方をハイキングしていて道に迷いそうになり、たまたま現れた土地の人に尋ねたところ、その人が肩を寄せてきて、腕をこちらの背に回して顔をくっつけるようにしながら前方を指差したりすると、親切はわかるが妙な気持ちになるものである。同様に、どこの団地や町でも、当方が急用で道を慌てて歩いている際、20メートル以上の距離から僅かに姿を見かけただけで声高に挨拶して極めて丁寧にお辞儀をする住人がいる。こちらの視野にもいくらかその人の像が入っていたりするとまことに恐れ入ってしまう。ついではながら、かように過度に丁寧な人の連れ合いがかなりブッキラ棒な人物であったりするのもよくあることである。これとは逆に、会社の帰

途に駅で隣のアパートの顔見知りの人の後から降りた時、改札口を出た途端にその人がやたらと歩行速度を早めて距離を引き離すことがある。多分背後の知った顔に気づいて、挨拶するのが煩わしいと思つてのことだろう。誰でも会話したくない時はあるし、そうした行動は起こりうるものであるが、これも妙なものである。

挨拶はそれぞれの土地の慣習とも関係して、その土地に馴れない者には結構厄介なことである。だが普通、どこの土地でも顔身知りと真正面から出会えば挨拶を交わすのが礼儀になっている。精神病院ではこの原則は当たらない。医療スタッフと患者の間柄として互いに熟知しているはずの患者と一週間ぶりに廊下で会うような場合、こちらが挨拶しても患者が応じないことはよくある。その患者が外出した時、公道で次々と疾走して来る自動車に向かって深々と頭を下げたりする。これは特例だが挨拶をやり合うこととその双方の関係が必ずしも単純でないことの一つの示唆である。

膨大な数の学生を抱える巨大な大学では何百人もの数の学生を前に講義が行われる。このような講義でも何回も続けると教師は受講する学生の何人かの顔を記憶する。こうした学生の多くは大学内のどこかで出会っても挨拶しないけれども教師もほとんど気にしない。事務所で顔を覚えた職員さえも挨拶しない場合が多いのである。これは一つの慣習のようであるから、たまに丁寧な挨拶をする学生や職員に出会うと教師の方が面食らってしまう。

小さな大学では教師も職員も学生も互いによく親しげに挨拶し合つていかにも家族的である。だが小さい大学が世の中の好景気で急激に膨張したような場合、かつての家族的関係を引きずって組織的活動の障壁になることがある。重要な会議の場所や日時がボス同士の廊下の立ち話で急に変わり、しかもそれが第三者である多数の会議メンバーに伝達されず、混乱をきたしたりする。つまりフェース・ツー・フェースの挨拶という現象の好ま

しきは必ずしも組織にとってプラス面だけを表すものではないといえる。これは思春期の高校生が朝の起床時に両親に挨拶しないでも心理的には親しい関係を保っていて、家族組織と機能が維持されている場合と（規模の大小の差はあるが）あたかも逆のケースといえよう。

3. 宣伝のための顔

街を歩いていると化粧品やエステティックの宣伝用に若い女優の巨大な顔の看板が目につく。雑踏する商店街の一隅に掲げられたものの場合とはかくとして、郊外の静かな住宅地にもこの種の看板があって、一瞬目立ちますが景観を損ない、環境破壊にもつながるのに広告会社は気にとめないようである。顔を出された当の女優も責任は感じておらず、商売の宣伝に採用されたことで満足していよう。パーソナルスペースという点からみても、顔が美しいか否かの識別は遠すぎてはできないようにこれほど近くては困難なわけだ。

確かに顔は宣伝でとくに頻繁に使われている。俳優とか政治家は尊大さやキザも武器にして大衆から注目されることが至上のテーマであり、周囲から無視されることほどの衝撃はないらしい。他人の目が気になるとか、顔を見られるのがこわいとかいう訴えは神経症患者に限らず日本人の多くに見られることで、臨床心理学でも対人恐怖の一徴候としてとりあげられている。ところが同じように他人の目を気にするにしても、いかに多くの人に見られるかに気を配るという方は病理現象とはみられない。人に顔をみられることほどの幸せはないと述べたある流行歌手の言葉もしごく当然のことと聴きとられている。目立つことをよしとする、自己顕示の時代がまさに背景にあるのである。この状況は実質を伴わない虚像の構築や他人を傷つけても自分を売り出す傾向を著しく助長しているといえる。

テレビのコマーシャルは年々派手になり、またコンピュータグラフィックスの力を借りて一段と凝ったものになってきている。ここ

にも数える暇のないほど頻繁に美女の顔が登場する。食品や薬品の宣伝にまるで関係のない水着の女性が現れてにっこり微笑む。『視聴者は美女の顔に魅きつけられても食品の内容は記憶しないかもしれない…だが無意識的にはその食品を覚えさせられてしまう…』。こういった話が喧しかったのは随分以前のことで、放送上の規制はあるはずだが、今日では誰もなにも言わなくなった。

コマーシャルの中ではテレビの倫理規定もあまり関係が無いようだ。不道徳的な場面や非教育的な映像が飽くことなく現れてくるが批判の声は聞こえない。たかがコマーシャルだからであろうか…されどコマーシャルである。コマーシャルだけのための雑誌もできたし、コマーシャルだけをビデオに録画して繰り返し見て…それをスポットしている元のテレビは見ない若者もいるという。出演を機に自分を売り出してたちまちアイドルになる人も一方、もの珍しさを売りものに文化人や著名人がコマーシャルに使われる。

オリンピックで好成績を挙げた女子選手のビデオどりのビデオで絶え間なく「こちらを向いてください。綺麗ですよ。そう。とても綺麗ですよ」としつこく言い続けるカメラマンの映像が印象的であった。実際、目立ちたがりの人にとってテレビほど顔を売るのに良い機会はないし、またテレビ側も売れた顔をさらに売りまくるには手段を選ばない態勢ができています。タレントが名前を売って代議士になるのはありふれたことになったが大学教授になる者さえいる。逆に元政治家がタレントになったり、大学教授で度々テレビに登場するうちにタレントになってコマーシャルに出る人もいます。テレビにとって大学教授の価値は今やポルノ女優と同程度のものになっていると言っても過言ではあるまい。視聴者はどのようなコマーシャルであれ喜んで見るだろう。だからこのことは結果としてある種の愚民政策に浸っている今日のわが国の現状を表していると言わねばならない。テレビの顔に社会の顔が映し出されている。

それにしてもテレビは単に報道に現実感を与えただけでなく、さまざまな色調のさまざまな程度の虚構性を与えるようになった。現実と虚構の間は本来、当事者の体験の度合いによって動く。本来、外側からただ見ているのは喋るより、喋るのは身体を動かして介入するよりは現実性が薄い。野球やサッカーの観客は興奮はするが自らが現実にスポーツしているわけではない。観客ばかり増えて、実際に身体を動かす人が（とくに青少年で）減少していると嘆かれたのは30年以上も前のことであった。それが今日では国の政治にまで敷衍している。手の届かないところにあった政治がテレビによってあたかも眼前で展開するよう感じられながら、同時に一億国民のすべてが評論家になってしまった。自らが一票を投じて参加しているはずの政治なのに、あたかも演劇でも見るように自分たちとは別の人種が舞台上を動き回っているように眺めている。これにはむろん報道する側の責任がはなはだ大きい。

国の将来にとって重い決定要素となる首相や閣僚の決定が党利や党略で動かされ、政治そのものが著しく不安定なのは国民にとっても不安であるし、ゆるがせにできないことである。国の政治は国民にとって真剣な問題であり、一人一人がなんらかの形で参加するのが民主主義の基本であり、決してただの観客であってはならないはずである。ところがテレビのワイドショーでは、芸能界やプロスポーツ界のスキャンダルを騒ぎたてるお馴染みのお笑いタレントが司会者で登場して、この事態を駄洒落れまじりに面白、おかしく喋りまくる。視聴者は戯画化された政治を、まったく自分とは無関係な、見世物でも見るように嘲りながら眺めるのである。自分たちこそこのだらしのない議員を選んだものだという責任はまったく忘れたかのようにである。

ともあれ、確かに顔は社会においてある種の役割を示している。顔役、顔パス、顔をつぶす…などこれらの言葉は顔によっていかに社会関係が動かされるかを示唆している。顔

は当人の社会的役割や地位を表すし、その人のキャリアも示す。顔は年功を表しており、いかに現代でも特定分野を除いて20歳の人では顔が利かない。だが逆にキャリアはその人の顔にとってある役割を押しつけ固定化することがある。社会はある顔にある役割しか認めない。当人が従来の役割を放棄して他の役割をとると個人的に言ってみても社会は認めたがらない。まさこれまでの専門以外の領域でいかに有意義な仕事をして（たとえそれが事実でも）その領域の専門家たちは認めない。自分たちの領域が侵犯されるという恐れと自尊心を傷つけられた不快感があるからである。もし当人があえて他の役割をとろうとすれば、それは社会の自分への評価、つまり自分の顔との戦いになる。こうした枠は確かに窮屈だが今の社会の安定に寄与しているのだろう。そうは言ってもこの枠から逃れる人々もいる。前述のマスコミに乗ってタレントになった教授の場合はその一つである。ただしタレントになっても教授の肩書きを変えないところが過渡期の現代に巧妙に適應している。他の場合は老人である。老人はこの戦いから解放される。社会は年老いた顔を見て、この人の役割は終わったと認めるからである。これは実は解放ではなく社会的に問題外になったのである。

4. 顔と国民性

電車の中の週刊誌の宙吊り広告は混雑で押し潰されそうになりながら通勤する多忙なサラリーマンに格好な社交の話題を提供する。宙吊り広告はまた時代の風潮の象徴のようなものである。その中には心理学の教授が「つき合わなくても、外見だけで相手を見抜くテクニク」などという表題の話を載せたものがあつたりする。とにかく速やかに能率的に事を運ぶのを最優先する現代では、互いに真実に触れ合う深い交わりよりも、その場で自分に有利な相手とつき合うことがなによりなのである。

90年代初頭、自民党内閣が倒れた後に政治

家の間に生じた合従連衡はこのような状況そのまますまに現している。しかしここにも時として問題を熟考する手がかりとなるようなサインが現れて興味をひく。少数党から出た細川氏が連立内閣の首相を辞めた際、新聞に政局を左右する諸人物の顔写真が並べられ、その傍らに略歴と寸評が記されていた。たとえば元自民党副総裁の故渡辺氏については「栃木弁丸出しミッチー節の庶民性と主要閣僚を歴任した政治力が魅力。品位に欠けるとの批判や健康への不安説も。」また、社会党の村山氏には「長いまゆ毛、好々爺然とした風貌が純朴な人柄そのまま。ぐいぐい党内をひっぱる迫力には欠ける」。そして新党さきがけの武村氏については「『ムーミンパパ』の愛称通りの実直そうな風貌と裏腹な熱血漢。新生、公明両党との政権主導権争いでは粘り腰を発揮」とある。この寸評を見た読者は、写真の顔が確かにそのまま当人の性格や心情を表している場合と、心情と顔はやはり異なるような場合があることに気づくだろう。そしてムーミンパパの風貌と熱血漢的性格の食い違い、純朴とか実直とか品がないという国民大衆にとっての印象と党内をまとめる指導力や他党とかけひきする政治力とのズレ、あるいは大衆への顔と実際の国の政治を行う能力とのギャップなどを顧みると、顔・心情・社会行動の間柄はそれほど簡単ではないといえる。そしてさらに…

どのような人物が首相になったとしても、その人は日本と外国の間の物心両面の交流を促さねばならず、またそのことによって妥当な形で国内外の政治を果たさねばならない。つまりその人の顔は日本人を代表する顔であり、外国の大衆はこの人の顔を通して日本を知るといふ役割をとることになる。つまり首相になる人の顔は単に党内指導力の有り無しの問題と関連するのみならず、日本国民と外国の人々とのかけ橋にもなりうるものでなければならないのである。

だがここで注意すべきは、時代の流れは一部が急速に動いても他の部分は澱んでいるよ

うに動きが遅く、全体としてみると進歩とか発展は微々たるものであることだ。しかもあまりに早い動きが信頼を欠くように極端に遅い動きも頼りにならない。

日本には何時も同じ顔への信仰が存在する地域がある。たとえば政治の世界についていうと（実は社会でも、学校でも、芸術の世界でもありうるのだが）、選挙になると“看板、地盤、金”などという言葉が何時も現れる。××という大臣経験者で汚職の疑惑のあった人の出身の県の人が投票所の帰りに、テレビ記者の「誰に投票しましたか」という質問に対して「××さん」と答えている。「××さんには汚職の話があるが…」との重ねての質問に、その人は「爺さんの代から××さんのお父さんに投票している。父はその子の××さんに投票したし、自分も××さんだ」と応じていた。社会がいかに変化しようと、時代がどのように移ろうと、候補者がどのような人物だろうと、祖父も父も子も同じ地盤の同じ顔に投票する人々がいることも心得ておくべきだろう。むろんこうした選挙民ばかりであるとはいえない。だがこの種の人々に支えられて祖父も父も子も孫も政治家という家系が成立していくのである。

個人にとって顔に変わらない面と変わる面があるように政治の世界にもそれがあるけれども、全体としての日本人にもこの両方の面が認められる。変わらない面と言えば、何時でもどこでも日本人はいかにも日本人らしい顔をしているということである。とくに海外において日本人の少ない土地でたまたま日本人に出会った時にこの点はたちまち明らかになる。たとえばどこかの開発途上国で独り旅をしている途中で相手も独り旅の日本人に出会えば、顔を見ただけで直ちに日本語で声をかけ合うことができる。ところがニューヨークのような大都会では、日本人に限らず東洋人が多いが、日本国内では簡単につく中国人や韓国人と日本人の間の識別も慣れないと（アメリカ人はむろん間違いやすいが）日本人にもうまくできないことがある。日本語で

話しかけて通じないでハッとすることがある。東洋人は東洋人の表情を識別しやすく欧米人は欧米人の表情を識別しやすいのだが、人のおかれた状況によっては識別の基準も不確かになるようだ。

日本人の表情は不可解で何を考えているか分からないという外国人がいる一方、外国人の表情を読めずに誤解を持つ日本人もいる。吉川（1991）は顔によるコミュニケーションの背後に、同一人種の集団という文脈の中での知覚経験に基づく対人適応の技能があること、表情の不可解はこの文脈の違いによって混乱が生じたものとして捉え、それを証拠だてる実験を行っている。顔写真を記憶させる場合、日本人にはイギリス人よりも日本人の顔が、イギリス人には日本人よりイギリス人の顔の方が記憶成績がよかった。また同じ顔写真を見ても「特徴」として認識される部位が日本人とイギリス人では異なっている。たとえば日本人は眼の形により多く注目するがイギリス人は髪の色により多く注目するというふうである。

ところで、外国での日本人同士のやりとりは妙な形で日本的コミュニケーションのやり方の異質性を示す。アメリカや欧州の大都会のホテルでたくさん見かける日本人同士が朝、顔を合わせても挨拶をしないことがある。これは日本ではやらないことを外国ではやるということのテレ臭さであろうか。それとも外国に来てまで日本人に会いたくないということだろうか。元来、日本人は十分に知らない他人に向かって自分の感情や考えをそのまま表出することはないし、そうした感情を表情に表すこともできるだけ抑えようとする。他方、アメリカ人では初めて出会った人でも会えてよかった気持ちをおおげさな身振りと言葉と満面の微笑で表現する。その時悲しければ泣きわめき、嬉しければ歓声をあげるが、その場が終わればその感情は急速にひいて安定した普通の表情に戻る。もし日本人であれば（とくに昭和一桁以前の生まれの者では）それだけの情感を示せば後々まで糸をひ

く。

相手の顔を見る場合も西欧人との差が著しい。元来日本人は対話の際、(前述の授業場面は別として)相手の目を見ながら話すということをしない。やたらと相手の顔を見るのは失礼であるとされているし、そのように思う。ところが相手を注目しながら話す話し方は西欧では躰けの一つであるという。相手を見るのは対話の場のみではない。たとえば彼等にとってちょっと珍しい物を持つ人に出会うと、まずその物を注視し、またそれを持つ人にまなざしを向ける。20年前、既に日本ではかなりゆきわたっていたが、小さな滑車を付けた大型旅行ケースを引いた日本人旅行者がヨーロッパの空港で周囲の外国人旅行者にジロジロ見つめられ、「こんな便利なケースどこで買ったのか」と質問されたなどという例もある。日本人同士の間ではこうしたことはほとんど起こらないだろう。見知らぬ他人はただその珍しい物をチラッと一瞥するだけで通り過ぎて行く。

ある国の人の顔がその国の風土、社会・文化・民俗性などと密接に関連して分かちがたいことが、顔の識別の素地になっていることは概述の通りである。そのことは、しかし同時に風土や街にも特有の顔があるといった隠喩が可能になる。「尾瀬には何時でもあなたを迎える顔がある」といったJR東日本の広告はその一例であろう。大都会の昼と夜、過疎の村や新興住宅地などはそれぞれに顔をもつ。旅行者としてある国を訪問した際もしばらく滞在するとその国独特の顔をうかがうことができる。とはいえ、この顔も時代の流れの中で変貌していくのを知らねばならない。ある新聞記者はアフリカの大地を車で何日も走っていき、突如として沙漠にネオンの輝く街が現れて異様な気分になったと述べている。その地域の固有の顔が歪み、崩れていくのが感じとれたというのである。また、ある老いた日本人外交官が戦前の上海を思い浮かべて当てた語句は“妖”であったが、この街は今や中国で最も活気に溢れた都市として世界の

注目を浴びているといった変化を認めることができる。これらの変化はあたかもある個人の生活過程での変化に似ているようにみえる。

実際、特定の環境や風土から人間の特定の心理とそれに伴う顔や表情が生まれるのなら、同時に特定の顔をもつ住人が特定の情緒をその環境や風土に関わらせ、またそうした関与に基づいて環境をつくるとしても不思議ではない。実際、人の顔が骨格と型と皮膚で覆われているように都市もビルと道路から成る構造と多様な形と住宅群を彩る外壁から成っている。「〔空間を包む皮膚は〕情緒を多分に含んでいる。そして、内的な心の世界と著しい対応関係が存在している。…人間の住む空間、それは超近代的ビルのオフィス・スペースかもしれないし、…科学実験器具の設備された研究室であるかもしれない。…どの場合でもほとんど必ずといってよいほど、そこに生活し、働いている人達の情緒の投影が見られるものである。…結局のところ情緒空間の中におかれた個人自身がその空間を通じて、外部の世界との相互関係の種々相において、いかに多くの可能性を発見し、いかに多くの選択の自由があるかについて知ることなのである」(箱崎 1986)。

たとえば零下20度の真冬にニューヨーク・マンハッタン6番街54丁目辺りに立って、はるかに延々と連なる数十階の高層ビル群を眺めてみよう。日照のほとんどない凍てついた道路を、これまた氷結したように身振りの硬い人々が動いている。まさしく巨大なコンクリートの墓場のような風景を目のあたりにして、初めての旅行者は今、自分はニューヨークにいる、これがアメリカの一つの顔なのだと感じるのである。他方、イスラエルの中心都市のテルアビブの郊外ではまた別種の顔を見出すことができる。この土地で掘り出される特有の薄茶色の石で住居が造られているためか(これは法的な規制にもよるのか)全体として乾いた感触なのだが、それでいてどこか静かで、落ち着いた雰囲気がある。活気はあるが雑然としたエルサレムと対照的である。

テルアビブには欧米系のユダヤ人が数多く住んでいて多人種の行き交うエルサレムとは自ずから違うという見方もあるだろうが、しかしイスラエル国民の圧倒的多数を占めるのはアジア・アラブ系ユダヤ人であって、ここはどこまでも中東の一角なのである。

ヨーロッパの都市は絵になるが日本の都市はならないと言われる。わが国の都市も個性的な素晴らしい顔をもつようになるにはどうしたらよいのだろうか。日本のもつ独自の自然と文化をとり入れながら、あらためて手づくりの町づくりをすすめるために、為政者のみならず住民の一人、一人が身のまわりの生活から省みなければならないように見える。

参 考 文 献

- 菱山珠夫他：集団歩行時の縦並びと横並び
〔臺 弘（編）分裂病の生活臨床 創造出版
1978〕
- 平尾武久他：講堂における座席の成立
精神神経学雑誌 66巻 1964
- ホールE. 日高敏隆他（訳）：かくれた次元
みすず書房 1970
- 田中政子：Personal Spaceの異方的構造について
教育心理学研究 21巻 1973
- 山根一良：電車内姿勢に対する美的評価の記号学的分析 杉野女子大学紀要 21巻 1973
- 吉川左紀子：「顔」とコミュニケーション
7th symposium on Human Interface 1991
- 箱崎総一：柔らかない都市の柔らかない空間 時事通信社 1986